

宮崎先生が関心をもたれた

最終講義のメハサンダ遺跡

高 橋 堯 昭

さすが宗門史の大家、歴史への関心は一通りではなかった。かつて私が印仏研で発表したメハサンダに非常に関心をもたれたとみえて大学で執拗に質問された上、「兵庫県の三つの宗務所の合同夏期講習会で、その話を、又大乗仏教成立時のガンダーラの社会状況を併せ説明してやってほしい」と講習会に呼ばれた。そして先生自ら一番前に陣取って熱心にメモをとられていた為、私も力が入った。

まずガンダーラの遺跡のほとんどは小乗の律に則った構造、そして又遺跡から出る碑銘から見てもほとんど小乗の寺であつて大乘の痕跡はない。これらの遺跡はその石積みの方法や出土したコインからみて大体三、四世紀のもの。その頃には大乘經典は沢山書かれていた筈だから、大乘はどこに根拠をもつていたのだろうか。

これを經典からうかがうと「出家の菩薩がこの経を求めて白家の家に居ても過失はない。又この経巻を受持諷誦する菩薩がいると聞けば遠方であつても出かけて行つて、この経巻を供養し、或は許可を得て書写すべきである。(阿闍世國德号法經―大一七六三下―七六四上)」ということから大乘は小乗のような立派な寺ではなく、在家の中で起り、段々賛同者が出て、中には僧院の僧までも加わつたといえよう。この間の消息を示すものとして、首楞嚴三昧經(大一五―六三二)に「一切の二乗の儀式を行ずると現じて、内々には諸々の菩薩の行を捨てず」という文章があ

る。更にもつと進んで宝積経郁迦長者經に「僧院に入つたら誰が多くを学んだ比丘か、誰が戒律をよくする比丘か、誰が菩薩乘を保持する比丘かを見きわめよ」と、小乗の僧院で公然と大乘を学ぶ僧が出、又小乗もそれを認めるようになって来たことがわかる。

こうした經文に一番類似した遺跡がメハサンダの遺跡である。ここは布施太子が隠れ栖んだという所である。山の中腹に主塔が立っている。そこから二つの尾根が流れ出ている。否むしろ、そうした場所に主塔を建てたといえよう。それを向つて右をA尾根、左をB尾根とすると、A尾根には上から下へ七、八つの僧院が建ち、B尾根には大きな僧院と小さな僧院が三つ程坂に沿つて建てられている。(このA B尾根の間の谷を町から来る參道が通つている。)更にB尾根から谷をはさんだ大きな他の尾根には五つの僧院が散在している。

このA B尾根上の僧院と他の尾根上の僧院とは別のグループをなしていた。即ち、A B尾根の僧院の僧は一緒に食事をしていたと考えられる。即ちA尾根上の僧院の一部の食堂と思われる所からのみ食器が出土して他からは全然出土していないと、京都大学の発掘調査は注目すべき発見をした。

即ちA Bの主僧院からはなれた他の尾根上に散在する五つの僧院からは食器はもとより、食事を作る「カマド」のようなものが夫々出土しているから、この尾根上の僧院に住む僧達は、たかだか直線距離にして百数十メートルしか離れていない主僧院の僧とは食事を共にしないグループであったことがわかる。即ち大乘と小乗とは食べものが違ふから、或はこの食事を共にしないグループは大乘のはしりのものではなかつたらうか。とにかくこのメハサンダの主塔を拝みながら意見を異にしたグループが存在したことは注目すべきことである。

それらが「誰かに悪口を言つてはならない」「この經典は秘かにかくれて。或は誰か一人の為に」(勸持品)經文の

文字の如くひそやかであれば問題はなかつたが、これが段々力がついて来て、勸持品の文字の如く強圧的になると、「数々擲出・遠離塔寺」ということになる。こうした状況を示す唯一の遺跡である。

更に宮崎先生が関心をもち、質問をくり返されたのが、ガンダーラの社会状況を説明した後であった。郎ちガンダーラの山々を埋め尽した荘麗な僧院や仏塔、これらはシルクロードの通商で巨利を博した商人達が仏への供養と一門の繁栄を折り且つ又自らの社会的ステータスを示す為、競つて寄附した。即ちブラクリットテキスト・Angavijaが示すように、生れによるカーストから、梵志額波羅延問種経に示される「スードラがバラモンの娘をめとる」ような貧富による階級の分化があつた時代であつた。

これを示すものにジャイナ教の寺の竜神を祀る池のまわりに沢山のミニチュアーのタンクの模型が沢山奉納されてゐた。金持ちは現実の水槽を寄附出来たが貧しいものはそれが出来ない。せめてミニチュアーのもので奉納出来る時代になつた。ガンダーラで沢山出土する「小児の泥団子供養（小児が泥団子を供養した為アシヨカ王と生れ變つた）の彫刻」も同じ趣旨であらう。

こうした貧しい人達に夢を与えて救いの手を述べることを目標にした一つが大乗仏教であつた。この時代になると、金持長者の寄附にたよつていた小乗仏教も手をこまねいてはいられない。四分律・五分律・摩訶僧祇律・根本説一切有部毘奈耶に文章の差こそあれ二仏・背の高い塔そして泥団子の話を附加している。即ち釈尊が旅しておられるとバラモンが耕作していた（これもカーストの乱れ）。バラモンは釈尊を見て合掌した。釈尊はにこりと微笑された。弟子達のなぜほえまれたのかの質問に、釈尊は「彼は二仏を拜んだから」と答えられた。そして「二仏？」という弟子達の不審に、「この足元に迦葉仏の塔が埋つている」と答えられ、「それ拝みたければバラモンから団泥をもらつて

来て供えよ」と言われた。そうすると、「高さ一、底辺 $\frac{1}{2}$ ヨジャーナの背の高い塔」が現れたとある。

然もその本文の偈に「閻浮提の黄金より真心をもった一団泥の方が」とある。かく小乗も貧しい人に手をさしのべる時代、これこそ大乘の出て来た時代相であつた。

こうした小乗全盛の中から大乘が出て来た時代の、その過渡的な情勢を示す遺跡がメハサンダであるといえようと、かく講習会での宮崎先生の質問に答えて話した。然もその質問は三十分にも及んだ。

このテーマが奇しくも私の最終講義となつた。あの講習会の時、「經典から大乘の成立を論ずる人は多いが、遺跡から考える人はいない。この方面を徹底的に追求されたら」とのアドバイスをうけたが、ロータリーのガバナーに推され雑事に追われ研究をきわめられぬうちに最終講義になつてしまつた。さぞかし先生「あれからちつとも進んでいないな」なんて苦笑されていたに違いない。

最後に先生も父親だつたな一と思われることがある。私が「風流説法よくわかる法華経」や「愛と思いやり一和尚ガバナー卓話集一」を出そうとした時、「出版社はきまつたかね、きまつていなければ英二の所でね」と一言言われた時、やはり家族のことを思っているんだな一と学識と人間性兼ねそなえた先生をしみじみ思つた。

(仏教学部教授)